



はじめてとらきち君からの手紙を読む方へ、はじめ君は店長の初孫です。多少の可愛いがりすぎは、お許し下さい。



相模原にワールドサーカスフェスティバルがやってきた！はじめ君、2回も行きました。

はじめ君、初めての光景に大興奮！空中ショーでは首を直角にまげ、口をポカンとあけていたそうです。ピエロの演技には、声を出して笑っていたそうです。

そうです…と言うのは、唯一ボクだけお留守番…。50年ぶりのサーカス行きたかったなあ(ー)

でも、はじめ君にとって良い思い出になったと思います。よかったよかった(^)

小野家唯一の息子、ポメラニアンのココちゃんも歳には勝てません。歯も抜け落ち、固いご飯は食べられなくなりました。今年で17歳ですから、人間年齢で換算すると84歳。

残った右目の白内障も、ちよつとずつ進んでるようで、時々大好きなジャーキーも、目の前にあるのに探す始末です。獣医から、「目が見えなくなっても、いつものお散歩コースを作っておけば大丈夫」とのことなので、牛歩のごとくゆっくりとココのペースで今日もお散歩に行ってきました。

感染症に罹ったらエラいことになるので、免疫を上げるためココのご飯は慎重です。15歳以上の高齢犬専用の餌を入れる前に、輝源にルミンと最近入荷したりポポを溶かし、ジャーキーに染みこませます。餌を入れた後、上からフェカリンをかけて完成です。そのせいか、もう半年以上もカットをしていないのに、毛並みはとてきれいです。

飲み水もココの毛から、白内障や免疫、歯周病、感情項目では幸福・喜び、心配・不安など30項目をいれた波動水を作り飲ませています。それでも、前は家に入るなり、「ワンワン」とお迎えしてくれたのに、寝ているココを見ると、ドキッとして、思わずココの名前を連呼してしまいます。心配しているとその心配が実現してしてしまうので、考えず日々一瞬一瞬のココとの楽しい時間を過ごしています。一応、心の準備だけはしておきましょう(^;)



## ほっこりする話

幼くして父親を亡くした女の子が、小学校に入学する頃のこと。周りは皆、親から買ってもらった赤いランドセルを背負っている。しかし、その子の家は母子家庭の為、ランドセルを買うほどの余裕がなかった。もちろん、そんな事がわかっていたその子は、ランドセルが欲しいと言えなかった。子供ながらに、それはお母さんを困らせる事だとわかっていたからだ。でも、毎日友達と通学していると、どうしてもあの赤いランドセルが欲しくてたまらなかった。お店のショーウィンドーにある、ピカピカの赤いランドセルを眺めながら彼女は考えた。



「お母さんに迷惑をかけるわけにはいかない。でも、私もあの赤いランドセルが欲しい…。そうだ！きっとお父さんなら私の願いを叶えてくれるに違いない！」そう思った彼女は、天国にいるお父さんに手紙を書くことに。まだ、習いたてのひらがなで、一生懸命にハガキを書いた。

「てんごくの おとうさんへ わたしは、ことししょうがくせいになりました。べんきょうもいっぱいがんばって、おかあさんをたすけようとおもいます。だから、おとうさんにおねがいです。あかいランドセルをください。いっぱい、いっぱい、べんきょうして、がんばるから。いいこにしているから。おねがいします」もちろん、天国へのハガキ。宛名は「天国のお父さんへ」と書いて、ポストに投函した。

郵便局の職員がそのハガキを見つける。宛名は天国…？ハガキの表には、幼い彼女が一生懸命書いたあの記事…。いつものように差出人不明で送り返すわけにも行かず、仲間の職員に相談した。

「ねえ、見て、このハガキ…。どうしたらいいだろうかぁ…。送り返すにはあまりにも残酷だよな」「う～ん…。そしたら、僕たちがこの子の天国のお父さんになろうよ」「えっ、どうやって」「仲間みんなにお願いして、ちよつとずつお金を出し合って、ランドセルを買ってあげようよ！」

そして、郵便局の職員みんなでお金を出し合い、真っ赤なピカピカのランドセルを買うことに。そのランドセルを小包にいれ、お父さんのメッセージを書いて、その子の家に送った。

「○○ちゃん、お手紙ありがとう。お父さんとってもうれしかったよ。いつも頑張っているのを天国から見ているからね。これからも、優しい人になってね。そして、お母さんを助けてあげようね。天国からいつも○○ちゃんのことを応援しているよ。ちよつと遅くなったけど、ランドセル送るね!!」

数日後、ランドセルとメッセージの入った小包がその子に届き、お父さんからランドセルをもらったと飛び跳ねるように喜んだ。

どんなときも、どんな人にも優しい気持ちで(^o^)